

JOHNEN 定の愛

2008(平成20)年5月12日鑑賞(東映試写室)

★★



監督＝望月六郎／出演＝杉本彩／中山一也／阿藤快／高瀬春奈／江守徹／内田裕也（東映ビデオ配給／2008年日本映画／109分）

第2章

愛し方、愛され方はいろいろ

……『花と蛇』1、2に続いて杉本彩が挑戦したのは、阿部定。しかし、5作目ともなると、作り方の工夫が大変……？ 現代から昭和11年へと、時空を越えて物語が展開するのは『IZO（以蔵）』（04年）と同様だが、そのキーマンとなる内田裕也の役割は……？ また、肝心の興奮度についての、『花へび』や『ラスト、コーション』（07年）との比較は……？ 最後に、もしあなたが裁判員なら、阿部定への判決は懲役何年……？

阿部定映画5作目は……？

昭和11（1936）年に起きた、阿部定による石田吉蔵の男性器切り取りという猟奇事件は、軍靴の足音が近づく暗い世相の中、世間の注目を集めた。なぜか私もそんな事件を小学生の頃から知っていたし、「阿部定事件」をテーマとした映画も次々と。

その代表は3作目となる大島渚監督の『愛のコリーダ』（76年）。日活ロマンポルノの大スター宮下順子主演の2作目『実録 阿部定』（75年）を見逃していた私にとって、『愛のコリーダ』は印象深い作品。また、2008年に新設された第1回ベストマザー賞で初代No.1に選ばれた黒木瞳が阿部定を演じた『SADA』（98年）も印象深かった。ちなみに、1作目の『明治・大正・昭和 猟奇女犯罪史』（69年）を私が全然聞いたことがないのは、大学入学直後で学生運動に夢中になっていたため、こんな世俗のことには目が向いていなかったため……？

そんな「阿部定事件」に女優杉本彩が目をつけ、「上級で上質な猥褻」を目指したのは当然だが、さて望月六郎監督による阿部定映画の5作目は……？

🎬 『花と蛇』 1、2に比べると……？

杉本彩は東レ水着キャンペーンガールでデビューし、「学園祭の女王」として一世を風靡した後、セクシーアイドルとしてバラエティー番組などで活躍していたらしいが、その「本性」を発揮した(?)のが、団鬼六原作のSM映画『花と蛇』(03年)での熱演。これは私にとっては1つの「事件」とも言える出来事で、商業映画としてホントにこんな映画が公開されたことに大感激。その続編である『花と蛇2 パリ/静子』(05年)と共に、大げさに言えばよだれを垂らしながら鑑賞したもの……？

それほど『花と蛇』1、2の出来はすばらしいものだった。しかして、それに比べて『JOHNEN 定の愛』の出来は……？

🎬 『ラスト、コーション (色、戒)』の方がよほどリアル！

『花と蛇』のSMシーンの迫力は絶品だったが、近時のセックスシーンのNo.1はアン・リーアン・リー監督の『ラスト、コーション (色、戒)』(07年)。梁朝偉トニー・レオンと湯唯タン・ウェイの絡みは誰がどう見ても本番をやっているとしか思えないような迫力だった。ところが、杉本彩が「これは上級で上質な猥褻」と称した『JOHNEN 定の愛』で見せる阿部定(杉本彩)と石田吉蔵(中山一也)との絡みは、かつての日活ロマンポルノの迫力にも及ばない平凡なもの……？ 隠すべきところは隠して、腰を動かすだけ。唯一迫力があるのは杉本彩のあえぎ声、というのはいかがなもの……？ また、映像技術の進歩を逆手にとったくだらない映像が、屹立した男性器を光輝く世界の中で登場させるもの……。

こんな映像を観て興奮する人がいるの……？ 杉本彩の美しいヌード姿を拝めるのはありがたいが、この程度のセックスシーンなら、無数に販売されているアダルトビデオの方がまだマシでは……？

🎬 短いセリフはオーケーだが……

ロックミュージシャンとして日本のロックンロールの世界に大きな力を持っているのが内田裕也。彼は映画にもたくさん出演し、それなりの存在感を示しているが、長い白髪がトレードマークだから演じられる役が限定されるのは仕方なし。したがって、それがハマった時はいい味を出すのだが、この映画のように出演シーンが多くかつ長いセリフになると、さてその演技力は……？

プレスシートには、「彼が主演した『コミック雑誌なんかいらない!』(86年)はその年の映画賞を独占。カンヌ映画祭でも絶賛を受け」と紹介されているから、彼の演技にケチをつけるのは勇気がいるが、そのセリフ回しを聞いていると私にはイマイチ……。さて、あなたの評価は……?

なぜ、あえてこんなつくり方に……?

阿部定事件を描く映画も5作目となると、アプローチの仕方を工夫しなければならぬのは仕方ないところ。そこで望月六郎監督が採用したのは、三池崇史監督の『IZO(以蔵)』(04年)方式……? 人斬り以蔵こと岡田以蔵は「幕末モノ」の有名な人物だが、時間軸をハチャメチャにし、位相の世界を遊泳させながら描いたのが『IZO(以蔵)』の特徴(『シネマルーム6』222頁参照)。ちなみに、『IZO(以蔵)』で主演した中山一也が、『JOHNEN 定の愛』でも石田吉蔵役で出演しているのは何たる偶然……?

映画の冒頭は、赤襦袢姿で胸をはだけて吉蔵の上にまたがる定と、その下で首を絞められながら恍惚の表情を浮かべている吉蔵との絡みのシーン。これが昭和11年に起きた阿部定事件の真の姿! ところが、その後一転して時代は平成20年に。そしてそれは、カメラマンのイシダ(中山一也)が海岸を舞台にモデルのヌード写真を撮影しているシーン。そこに登場するのが、内田裕也扮する白髪の老紳士大宮五郎。彼がカメラマンのイシダを自宅に招いたのは、美しい妻サダ(杉本彩)のヌードを撮影してもらいたいため……? そこからはじまる物語は、時空を越えて以降あちらこちらへと飛び回っていくことに……。

これはもちろん1つの工夫だが、望月六郎監督はなぜあえてこんなつくり方を……?

時代がかった裁判シーンは……?

裁判員制度の施行が2009年5月からと決まったが、調査によれば依然として裁判員になりたくないという人が多いから困ったもの。こんな状態で本番に臨んだら一体どうなるの……?

今の時代につくる映画の裁判シーンは、そんなことも少しは意識すべき(?)だが、『JOHNEN 定の愛』における裁判長(江守徹)を中心とした法廷シーンは、昭和11

年のものだけに時代がっているのは仕方ないとしても、あまりにも異様……？ やたらめったら激しい言葉が飛び交うが、この事件における争点は一体ナニ……？

ちなみに、この映画によると、被告人阿部定は懲役6年の実刑判決（歴史的にも痴情の末の殺人と認定され懲役6年）だが、基本的に厳罰化の流れが強まっている今、あなたが裁判員なら、阿部定に対して、さてどんな判決を……？

2008(平成20)年5月13日記

ミニコラム

新婚旅行は俺が先！

阿部定も石田吉蔵と結婚できれば、きっと新婚旅行に行き、赤禰袴姿で胸をはだけた激しい「絡み」をくり返したのでは？ いくら軍靴の足音が近づいた昭和11（1936）年でも、それくらいの自由はあったはずだ。

ところで、日本初の新婚旅行は誰が？ それは坂本龍馬（1835～67年）。龍馬が妻のお龍を連れて鹿児島県霧島市を訪れたのがそれだ。龍馬が心血を注いだ薩長同盟が成立したのは1866年1月。その直後の3月に西郷隆盛らの強い勧めで龍馬夫妻が霧島市の塩浸温泉などを訪れ、2週間ほど滞在したのが新婚旅行第1号というのが定説。龍馬ファンはそんな定説に長い間納得していたはずだ。ところが、NHK大河ドラマ『篤姫』の人气が上昇する中でがぜん有名になった、瑛太演ずる薩摩藩家老の小松帯刀（1835～70年）が、龍馬の対抗馬として登場してきたから

お立ち会い！

08年10月16日付読売新聞夕刊によると、その根拠は小松が残した日記。鹿児島市のNPO法人「まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会」代表理事の東川隆太郎氏が日記を調べたところ、ともさかりえ演ずるお近と新婚3カ月目となる1856年の4月23日から5月6日の間、彼はお近と共に霧島市にある榮之尾温泉に滞在したと記されているらしい。これが新婚旅行第1号だとすると、龍馬夫妻より10年も早いことになるから、従来の定説は覆される。

土佐の龍馬と薩摩の小松は盟友だが、こと新婚旅行第1号の栄誉をめぐっては、高知市桂浜にある龍馬の銅像と鹿児島市山下町にある小松の銅像はきっと、「ワシが先！」「いや、おいどんが先！」と競い合っているのだろう。

2008（平成20）年10月24日記